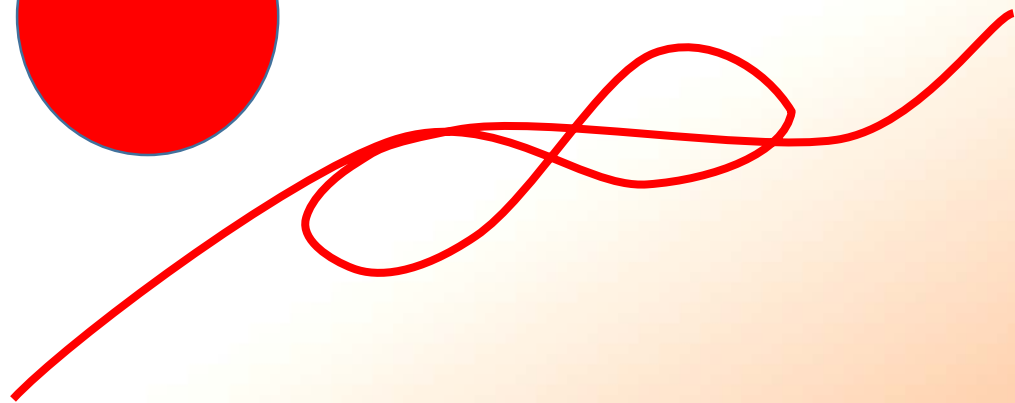
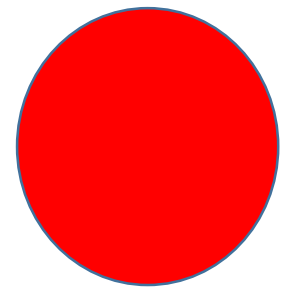


「多死社会」での新しい仕事、 看取り士とは



RIETI BBLセミナー

2019年11月7日(木)

藤 和彦 (RIETI上席研究員)

はじめに

あらゆる知のなかで自然科学に突出した価値を置く考え方だけでよいのか？

未来学者のアルビン・トフラーの警鐘（未来の衝撃）

- 世の中が大きく変わるときに私たちは得てして過去の考えから抜け出せず、直線的にものごとを考える傾向がある。

これまでの未来予測の問題点は、社会の変化に応じて人間の価値観（どのような意味での幸福や豊かさを求めるのか）が大きく変わるという視点に欠けていること

多死社会での「望ましい死に方」

人類初の「多死社会」が到来

- 昨年の日本の死者数は136万人（出生数の1.5倍）
- 2025年の死者数は約150万人、2040年は約170万人へ
- 高齢者の比率が90%、30年後には95%になる？

失われた「看取り」の文化、死生観を忘れた日本人

看取り士（「いのちのバトン」をつなぐサポーター）

- 「抱きしめて看取る」手法、「望ましい死」という概念を提唱

パラダイムシフトが進む「家族のあり方」

「超ソロ社会」の出現

団塊ジュニアの老後(2040年から)をどうするのか？

「家族」の枠から外れつつある埋葬形態(共同墓、散骨など)

- スウェーデン(「国民の家」構想)で普及する共同墓

縄文人に学ぶ(共同体の統合に先導する墓の再編)

家族の役割は「看取り」(ヘーゲル)

血縁家族の呪縛を乗り越えよう

人を人たらしめているスピリチュアリティ

人間の価値を「生産性」で考える発想だけでよいのか？

「国民の家」構想のベースにある「人格崇拜(デュルケム)」の論理

認知症が教える人間の価値とは(根本的な感情が作る「その人らしさ」)

QOD(死の質)が問われている(台湾の取り組み)

- 21世紀初頭から進む「終末期医療の合理化」と「臨床宗教師の養成」

地域が担っていた江戸時代の「看取り」

介護は多死社会における基幹産業

AI化の進展でわかってきた人間の強み(身体知)

AI時代で重要となる仕事(デヴィット・グレーバー)

- ケアの提供という要素が重要だが、賃金が低いという理不尽な事態が発生

介護は本来クリエイティブな仕事

- 「死は無価値」のままではモチベーションが上がらない

認知症介護の醍醐味(ビッグデータによる分析が役に立たない)

介護分野へのテクノロジー導入(感知系がメインに)

多死社会に不可欠な母性資本主義

デジタル経済の限界（デフレ化の進展）

人間の感情に価値が生まれる（人をモチベートする「熱量」）

陽の経済、陰の経済（「内なる神性」という共通理解）

人的資本の中で「ケア」の重要性が高まる（「気遣い」も立派な知能）

- 総労働力に占める医療・介護関係従事者の比率は15%から25%へ（2050年）

母性資本主義のフロントランナー（看取り士）

- 時給8000円、生命保険のリビングニーズ特約が利用可能、「おひとり様」の幸せな最期に尽力（地方自治体との連携）

母性の通貨で多死社会を乗り切れ

貨幣の本質は「譲渡可能な信用」(「社会における関係のあり方」を反映)

貨幣の信用の源は「聖なるもの」(貨幣の「幣」の意味)

仮想通貨が創る「価値観を共有した社会」(陰の通貨)

「幸齢者」をアンカーにした仮想通貨(看取り(いのち)コイン)

- 時間預託通貨、看取り士をサポートするエンゼルチームの報酬として活用可能

ご静聴ありがとうございました！